

なりたの昔話

第9回

このコーナーでは、昔から語り伝えられてきた成田の昔話や伝説などを掲載しています。

【参考文献】コミュニティ成田No.33(1990年10月発行)

片齒の梅

そのむかし、坂田ヶ池には、雄の大蛇が住んでいました。この大蛇は、毎年梅雨どきになると、ここから4キロほど離れた長沼に住む雌の大蛇に会いに行きました。大蛇の通り道にあたる土手は、このために何度丈夫に築いても、崩されてしまいます。

その年も、また土手が切れ、水がどんどん流れ始めました。村人たちは、子どもから年寄りまで働ける者全員で、土手直しの工事にかかりました。

「おい、そこへもう少し土を入れろ」

「こっちの人手が足りないぞー。2、3人手依いに来てくれー」

でも、どうしても土手は直りません。村人たちは、疲れきって工事をやる気力もなくなりました。

そこへ、子どもを背負った見知らぬ女の人を通りかかり、

「この土手は、人柱を立てねばだめだ。何度やつても崩れるよ。」

と告げ、

「おらあ、ゆんべ、夢を見たんだ。そしたら、夢の中にこの池の神さまが出てきて、人柱が必要で、おらになれっていつてたんだ。」

といいます。

村人たちは、言われるままに子どもといっしょに女の人を土手の下に埋めました。背中の子どもは泣きもしないで、埋もれるまで梅をかじり続けていました。

そうすると、今までいくら積んでも流れてしまった土がどんどん積もって、見る間に土手は出来上がりしました。そして、それからはずっと崩れることがありませんでした。

次の年になると、人柱を立てたところから、1本の梅の木が生えてきました。その木は成長してやがて花を咲かせ、実をならせました。

村人たちは、この実を見て、

「あのとき女の背負っていた子どもが、梅をかじっていた、きっとその梅から芽が出てこの梅の木になったのに違いないぞ。」

「そういえば、あれから一度も土手は崩れないなあ。」

「ありがたいことだ。」

この梅は、誰言うことなく、いつのまにか「片齒の梅」と呼ばれるようになり、だいに守られていきました。



編集後記

「下総歴史民俗資料館」を訪れると、さまざまな常設展示の中でも動物の形をした埴輪の数々が目に留まります。馬や鳥や魚などの中に、全国で1つしかないといわれる貴重な埴輪も。それはムササビ型埴輪で、手足を広げて滑空しているムササビの姿を表現したもので、愛嬌たっぷりの表情が見る人の心を和ませてくれます。3月10日まで企画展が開催中のこの機会に、ぜひ訪れてみてはいかがでしょうか。

平成25年2月15日号 No.1237

成田市のホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>

リサイクル適性(A)
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。